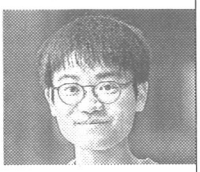
—広　告—

KIT
キャンパス
レポート305

文・杉村裕之

他者を気遣う温かな目線
人間陶冶の私学を再認識



横山兄（よこやまけい）
金沢工業大学大学院工学研究科
機械工学専攻
博士前期課程二年
静岡県　聖隷クリストファー高等学校出身

男三兄弟の名前は「兄」「礼」「永」。漢字の画数は全員、五画で、しかも「けい」「らい」「えい」と韻を踏む。「あに」とクラスメイトがあえて呼ぶ、人懐こい横山さんから見えるのは、家族愛に包まれたほのぼのとした家庭だ。

そんな彼と言葉のキャッチボールを楽しみながら、独自の教育理念で人間を陶冶する私学の意義を反芻していた。彼の通った中高一貫校には、キリストの教えに基づく「労作」と呼ぶ授業があった。校内で農作物を育てたり、知的障害者や高齢者の福祉施設を訪問して話し相手となったり、奉仕活動の草むしりをしたりした。

「目線を合わせてゆっくり話せば、コミュニケーションが取れることを学びました。そのおかげで、街なかで障害のある方を見かけても、ごく自然に接することができます」

多彩な趣味のひとつに乗り鉄がある。高校時代に見たユーチューブで、東海道新幹線の開発に戦前、飛行機を設計した技術者が携わっていたことを知り、進路を航空工学に定めた。さらに、KITの個性をつくる課外活動の夢考房に憧れ、「目標に向かって努力、挑戦する経験をしてみたい」と、小型無人飛行機プロジェクトに加わった。

その成果を競う全日本学生室内飛行ロボットコンテストにも参加した。優勝こそ逃したものの、三年次に自動操縦部門でベストパイロット賞を獲得した。「夢考房の技師やメンバーの協力なしには達成できませんでした。社会へ出ても、一緒に働く人のことをまず考えなければと思うきっかけになりました」。私学での特色ある学びと、誰からも頼りにされる彼の豊かな人間性が、やはり見事にシンクロしている。

研究テーマは、小型無人飛行機を駆動させる「誘電エラストマセンサ」だ。空力特性と収納性に優れたコウモリの翼に似た、伸縮自在の膜状の翼が完成すれば、超過酷な条件下の火星探査飛行機にも適用できる。そして、横山さんは筆者が理解しやすいよう、実験で使う高分子化合物のエラストマ膜を持参し、手に取らせてくれた。

何という気配りであろう。私が親しむ茶の湯で言えば、千利休が諭した「降らずとも雨の用意、相客に心せよ」である。聞けば、中高の六年間、茶道部で活動したそうだ。志望先は自動車メーカーの製造技術開発部門。彼の温顔無敵が来春、きっと周囲を和やかに快活にすることだろう。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号（〇七六）二四八-二〇〇